

2006年11月2日

学生企画事業「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」成果報告書

実施日 2006年8月3日～8月4日

代表者氏名 根津朝彦
専攻 日本歴史
学籍番号 20060405
代表者氏名 西山剛
専攻 日本歴史
学籍番号 20060404
教員責任者 安田常雄
教員責任者 小島道裕

【1.プロジェクト内容】

〔8月3日〕

しょうけい館、昭和館、遊就館（靖国神社内）を見学→歴博宿舎に移動し議論

〔8月4日〕

歴博「佐倉連隊にみる戦争の時代」を見学（樋口雄彦先生解説）→議論（以下、安田常雄先生参加）→映画「ゆきゆきて、神軍」鑑賞→最終討論

〔参加者数〕16名（総研大生13名、他大院生3名〈一橋大院、千葉大院、常盤大院〉）

〔総研大参加者〕根津朝彦、西山剛、室井康成、松岡葉月、佐貫正和、佐久間俊明、三野行徳、堀まどか、金炳辰、KORNEEVA SVETLANA、梅定娥、奥本素子、玉山ともよ

【2.成果報告】

8月3日の1日目は千代田区九段にあるしょうけい館、昭和館、遊就館を見学した。しょうけい館では戦傷病者史料館と称しているように兵士が実際の戦地でどのような傷を受けるのか展示を見て理解し、直接的な戦争展示を忌避する昭和館の展示からは被害者意識が強く加害意識が弱い多数の日本人を象徴する歴史認識を体感した。靖国神社内の遊就館では、その歴史観を集約させた館内上映「私たちは忘れない！」を鑑賞し、ある面では「大東亜戦争」を肯定する館内の展示を見た。見学後は靖国神社を軽く周遊した。国立歴史民俗博物館の宿舎に移動後、各自記入したワークシートに基づき1日目に見た3館について意見交換を行った。

8月4日の2日目は国立歴史民俗博物館の「佐倉連隊にみる戦争の展示」を樋口雄彦先生の解説を受けながら見学した。解説後さらに時間を割いて佐倉連隊展を見た。午後は安田常雄先生に加わってもらい、自己紹介を兼ねながら両日で見学した戦争展示について議論を行った。その後、遊就館等で描かれなかった側面を考察するために映画「ゆきゆきて、神

軍」(企画今村昌平、監督原一男)を上映。それから博物館にとっての戦争展示とは何か、映画の感想を含みながら1990年代以降の潮流である平和博物館の存在を踏まえつつ最終討論を行った。

本事業は「佐倉連隊にみる戦争の時代」で歴博が初めて戦争展示を行うことを契機とし、同時代状況を見ても、東アジアの歴史学者らにより協同して民間の教科書副読本(日中韓3国共通歴史教材委員会〔編〕『未来をひらく歴史』高文研、2005年)が作成され、『岩波講座 アジア・太平洋戦争』全8巻(岩波書店、2005年～2006年)が好評を博しているように時宜に適う意義ある企画であった。それは本年度(現時点)の学生企画事業で最多の参加者数が見られたことから実証されよう。

事業終了後は全員が感想文を作成し、感想文集として相互の体験と成果を共有した。創造的な研究の発想が生まれるのは他分野の人同士による知的交流であることは言をまたない。しかしながら本年度の文科フォーラム企画趣旨文章にも記されているようにそのような交流の機会は今中々もてるものではない。その中で、参加者から「それぞれの主研究の立場に立脚しながら、同一テーマについて論じ合うことによって、相互の知的関心の拡大および各研究分野での問題意識を深化させることが出来、かつ今後の研究発展を期していく上での信頼関係を、多様な院生や研究者との間に構築できた」とか「一人ではとても達しえない有意義な学びを多く得ることができた。それぞれ深い知見と専門をもった院生たちと見てまわるといことは、大変刺激的で面白い経験だった。他専攻の方々とは勿論であるが、同じ専攻の院生ともこのようなセンシティブな問題について語りあうことは稀なので、大変貴重な体験であった」といった感想が出たこと自体、本企画の成功度を物語っている。

具体的には、とりわけ留学生を交えて議論を行ったことで、今後の研究に求められる東アジアやグローバルな枠組みの中で自己の研究をどう位置づけていくかという問題意識を強く醸成できたと考える。これは昭和館について留学生から出された論点ではあるが「帝国圏内の朝鮮、台湾、満州の暮らしを一緒に並べないと一体何が起こったかはっきり言えないと思う」というような視角は多くの参加者に共有されたものである。

それとともに一人の兵士が被害者でもあり加害者でもある重層性(あるいは庶民の、もしくは庶民への戦争責任)をどのように展示できるのか、ナショナリズムと戦争展示の拮抗をどのように考えるのか、活発な問題意識が交換された。このことは世界に通用するトランスナショナルで普遍的な研究姿勢を培う上で大きな視野の広がりを獲得したと評価できる。

さらに全般的に展示されている資料(日記、手紙、遺書など)自体はよく眺めれば戦争の実相を伝えるものが多く、オーラル・ヒストリーの可能性を含め、もちろんそれをどのように展示者側が構成するかは重要な問題であるにせよ、「史料の中立性への幻想」といった指摘があったように鑑賞者自体のリテラシーが同時に大切であることが共通の認識にまで高まった。

この事業はもちろん日本近現代史と博物館展示に関心をもつ参加者が多かったという点はあるとしても、軍事史や戦争展示を専攻とする者は一人もおらず、上記の成果はまさに多分野同士の知的共同営為を通してなされたものであるということは強調しておきた

い。

なお本プロジェクトは『千葉日報』（8月7日付）と『朝日新聞』（8月4日付東京地域面）の記事で紹介された。これは単なる研究交流に留まらず、社会的な関心を喚起することに貢献した。

課題としては後述する点につながるが、感想文を読み返しても参加者のほとんどにジェンダーの視点で戦争展示を読み解く問題提起が見られなかったことである。戦争展示＝兵士＝男という強固なバイアスに引きずられたことは否めない。「男らしさ」を強要される兵士という観点もなくこのことは研究者のまなざしを内省する材料を提出した。

事業自体は好評であったものの参加者が大勢いたことと日程を凝縮したために討論の時間に不足をきたした。それにより今後の戦争展示の方向性や方法論の検討が不十分に終わったことが大きな課題である。

また、しょうけい館、昭和館、遊就館は戦争博物館であっても、1990年代以降に定着しはじめた平和博物館ではない。そのため加害責任の展示など重要な論点は、実際に見学した上で論じることはできなかった。世界における博物館の戦争展示の比較や戦争体験者との交流といったことも今後望まれる方向性であろう。

総じていえば短い時間の中で濃密な研究交流を通して長期的な学術交流の芽を形成するという当初の目的を十分達成できたと考える。本事業は久留島浩先生からも評価を受け、久留島先生を中心として国立歴史民俗博物館が主催したワークショップ「戦争展示のなかのジェンダー」（2006年10月13日）において総合研究大学院大学のPRを兼ねて「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」を報告する機会を得た。

事業が終わってからも、このプロジェクトで訪れることができなかった立命館大学国際平和ミュージアムなどの平和博物館を見学する参加者が複数人おり、一方で「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」は後期の日本歴史研究専攻の学生支援相談員によって発展的な企画も計画されている。これらは本事業の知的波及力の成果を裏づける好例といえよう。